

これからの幸せ 第5回 in 札幌

2023年10月31日(火) 道新ホール | 主催 浄土宗 後援 北海道新聞社

第一部 講演

ヤマザキマリ (漫画家、文筆家、画家)

第二部 座談

立川談慶 (落語家)
寺井孝導 (徳風山寶隆寺副住職、全国浄土宗青年会理事長)
ヤマザキマリ
戸松 義晴 (浄土宗総合研究所副所長) ※コメンテーター
笑い飯・哲夫 (漫才師) ※司会進行



破天荒な母の幸せ (ヤマザキさん)

第一部は、今春、対談集『人類三千年の幸福論』を刊行したヤマザキマリさんの講演です。東京生まれ、北海道育ちのマリさんは、17歳でイタリアに渡って絵を学び、今もイタリアと日本を往復して活躍。会場の道新ホールは幼少時のマリさんが舞台上に立ったピアノ発表の会場で、「あのあたりの席で今、母が聴いてくれているような気がします」と感慨深げに語り始めます。著書『ヴィオラ母さん』でも描かれた“破天荒なお母様”は札幌交響楽団の一員で、昨年末に89歳で天寿を全うされました。「楽器を積んで、教え子のいる北海道中をワゴン車で駆け回る生活。自分が戦争に生き残れて、毎日ご飯にありつける今の何もかもが嬉しくてしょうがない人でした」

「私が悩んでいると『そんな小さなことで悩んでばかばかしい』と一言で片付け、かと思うと夕焼けを見て『泣けてくるじゃないの』とため息したり、散歩の途中で四葉のクローバーを見つければ『私って幸運よね』と喜んだり。感情の全てをまんべんなく使い込んでいる人でした」
お母様が亡くなられたとき、教え子90人が集まり開いたコンサートは湿っぽさが微塵もなく、最後の演奏曲は「威風堂々」(E.エルガー作曲)。母との思い出を語る教え子たちはみな満面の笑顔だったそうです。「自分を精一杯生きた人は亡くなくても人を元気にする。それを痛感したコンサートでした」



『生きるとはそういうこと』と受け入れる

第一次世界大戦のとき、スペイン風邪の流行も含め、人はバタバタと死んでいきました。人の心は脆弱になり、そこに登場したのがヒトラーでしたが、今の時代も似た状況にあると思います。「大切なのは、動揺せず立ち止まって考えること。『長いものに巻かれてしまえば楽』と思考停止せず自分で判断すること」と語ります。
人間にとって「幸せ」は生きる糧で、幸せを感じられるからこそ頑張れる。でもそれを

追求するあまり自分を追い込んでしまうのは問題です。「自分に高すぎる目標を課さないこと。人生が思い通りにならなかったとしても、生きるとはそういうことだと素直に受け入れていくこと」と。幸せに執着しすぎず、世間の評価よりも自分の魂の訴えに耳を貸す…「あるべき姿にしがみつくなではなく、謙虚に毎日を生きていけば、四ツ葉のクローバーを見つけただけで幸せを感じられる。そんな人生の方が豊かだと思います」

幸せは相手と自分の間にある (談慶さん)

第二部はまず、立川談慶さんが、落語を題材に「日本人と幸せ」について語ります。「欧米が『我思う。ゆえに我あり』という自分中心の世界観なのに対し、『日本人は他人目線』とよく言われますね」。
落語が発達した江戸時代300年は、100万都市・江戸の半分にあたる50万人もの庶民が、全体の約20%程度の区域に押し込められて生活していました。『九尺二間の裏長屋』といいますが、そうした窮屈な住環境では、自分より他人を思う気持ち、いわば『付度』がなければとても共同生活は送れません。地震・台風・木造住居ゆえの大火災など、災害が多発する国土環境も拍車をかけた」と解説します。
日本人にとって、世の中は相手ありきの相対的なもので、幸せもまた「他人目線」とのバランスで成立している。その例として2つの落語が紹介されました。

鏡を知らない夫婦が互いに鏡の中の自分の顔を見て誤解しケンカになる「松山鏡」、ある男が一つ眼の人間たちの国で捕えられ、「二つ眼とは珍しい。見世物に出せ」と裁きを受ける「一眼国」。「同じことでも、『向こうから見たら違って見える』という感覚を共有できる日本人だからこそ、幸せも皆で分かち合うものという共通認識があったはず。幸せは自分の中にはなく、自分と相手との関係性のなかにあると思うんです」と締め括りました。



念仏と共に「法の灯」を拡げる幸せ (寺井さん)

北海道余市町に自坊のある寺井孝導さんは、全国浄土宗青年会の理事長をお務めです。青年会が本年実施した浄土宗開宗850年記念行事「法灯リレー」「同時同行念佛行脚」の記録映像を解説します。

5月に行われた「法灯リレー」は、法然上人が浄土宗開宗前に修行した比叡山青龍寺より「法の灯」を戴き、浄土宗を開かれた吉水之地・総本山知恩院まで約18キロの道のりを念仏を称えながら運びます。「法の灯」は知恩院御影堂から全国に分灯され、10月初旬、全国津々浦々で一斉に念佛行脚が行われました。「浄土宗開宗850年のキャッチフレーズは『お念仏からはじまる幸せ』です。紡ぎ紡がれたお念仏によって、明るい社会を開きたい…それが私と皆さまの真の幸せだと信じ、活動していきます」と語りました。



幸せへの様々な気づき

戸松義晴さんがコメントします。「ヤマザキさんのお話で『ありのままの自分を受け入れる』ということを思いました。人は認めてもらえば嬉しいし、否定や批判は聞きたくない。いづれにせよ、それに振り回されては動けない。「結局、人は自分がいいと思うことしかできません。自分に嘘はつけませんから」。
談慶さんのお話には、「幸せは、相手と自分との間にある。それを落語が『笑い』でつないでいるんだと再発見しました。浄土宗でいえば『お念仏を唱えながら、人と人との間で微笑み合って暮らすことかな』と。「だからこそ、同じ浄土宗僧侶として寺井さんのお念仏を拡げる活動には頭が下がりました」。

その後は自由討論です。「海外で貧乏な生活をしていた若い頃『いや、空気を吸って生きてるだけで幸せ』と実感したものです」とヤマザキさん。「僕は辛いことがあったとき、宇宙を思い浮かべるようにしています」と哲夫さん。「立川談志は『幸せの基準を下げろ』とよく言っていました。日がな一日、茶碗の蓋を見てニコニコしている奴にはかなわねえ」と談慶さん。「私たちは、お念仏を唱えることで仏様、ご先祖様、大切な方々と繋がります。その言葉や微笑み、ぬくもりが、合わせる手の中に蘇ってくる。それが『お念仏から始まる幸せ』だと思います」と寺井さん。
笑いの溢れる和やかな雰囲気の中、幸せへの様々な気づきが生まれた一期一会でした。

